

# 保育者は自らの服装の色彩をどのように決定しているのか -混合研究法による保育者の服装の色彩印象評価の分析より-

松延毅<sup>1</sup>, 姉帯彩香<sup>2</sup>, 林将平<sup>2</sup>, 香曾我部琢<sup>3</sup>

<sup>1</sup>社会福祉法人浄勝会出雲崎保育園, <sup>2</sup>家庭科教育専攻, <sup>2</sup>宮城教育大学教育学部家庭科教育講座

本研究では、保育者の服装の色彩による印象評価について、SD法を用いて印象評価尺度の作成し、その尺度をもとに、保育者のエプロンの色彩に対する他者の印象評価の特徴などについて考察を行う。そして、その結果をもとに、グループ・フォーカス・インタビューを実施し、保育実践において保育者が自らの被服の選択において、色彩のあり方をどのように意識しているのかを明らかにする。

キーワード: SD法、グループ・フォーカス・インタビュー、SCAT、保育、被服

## 1. 問題と状況

### 1.1 色が人に与える影響

私たちは、日常においてさまざまな道具を用い、自らを取り巻く環境とかかわりながら生活を営んでいる。普段あまり強く認識されることはないが、それらの道具や環境は人為的に彩色されていたり、自然の素材の色がそのまま生かされたりしており、その道具の選択や操作方法、その環境における人の行為や動作に影響を与えている。例えば、伊藤(2011) [1]は、食品のパッケージデザインにおいて、特定の食品において特定の配色が好まれて使用されていたり、特定の色彩が「高級感」や「甘さ-苦さ」などの特定の印象を与えたりと、パッケージの色が人の購買行為に影響を与えることを示している。萩原(2012) [2]も、商品パッケージデザインが、人の購買への潜在意識を刺激する初期の段階において色彩の重要性を示唆している。

### 1.2 服装と色が人に与える影響

人が物を購買する際に、色彩が大きな影響を与える商品の一つに服がある。押山(1997) [3]は、「被服の着用行動は、被服の色彩嗜好やデザインの嗜好によって選択され、行動自体が社会的文化的影響を受けている」と述べて、服装の選択において色彩が

重要な要素の一つであることを示している。佐藤(2014) [4]も、衣服を購買する際に、衣服のカラーバリエーションの多さが選択の楽しさというポジティブな感情を生み、さらに商品への愛着を形成することへとつながることを示している。つまり、被服の選択の際にその色は、その選択者個人内の好き嫌いという個人的な感情だけで決定されるのではない。自らが置かれた社会的状況を認知した上で、選択するプロセスの中で生起させた情動と、その商品に将来抱くであろう愛着の時間的展望を含めて決定される、心理的、社会的、歴史的な複雑なプロセスなのである。

この複雑な選択プロセスを明らかにしようと、被服選択における色彩の関連性について、色彩学や被服学などの領域だけでなく、心理学や情報処理学[5]、社会学[6]などの領域の研究者が多くの先行研究を行っており、学際的に研究がすすめられている。

### 1.3 教育学領域における服装と色

教育学の分野においても、幼児、児童や生徒を対象とした研究がある。家庭科教育では衣服の色彩選択における視野の拡大を目指した授業プログラムの構築と実践[7]や、児童や生徒を対象とした服装全般に関する意識や行動の調査研究[8]がすすめられてきた。また、美術教育においても、デザイナー養成に

における色彩教育の為の印象評価分析[9]などが進められ、主に2つの教科において衣服と色の関連性に関する研究が進められてきた。

また、教師を対象とした研究も見られ、田村(2003)[10]は女性小学校教師が実際に着用している服装とその色の実態を調査しており、教師が上着では白やピンク、下衣では紺や黒、ベージュなどの特定の色を着用し、派手な色の服装は避ける傾向にあることを明らかにしている。また、中学校教師を対象とした高旗(1996)の研究[11]では、教師が自らの服装について、生徒に対する生活指導における制服指導と関連付けて、同僚からのまなざしと生徒からのまなざしとの間でバランスをとりつつ選択していることを示唆している。

#### 1.4 保育者の服装と色

児童、生徒、小・中学校教諭を対象とした服装については、ある程度の先行研究がある。しかし、幼稚園・保育所を対象とした服装の研究については、幼児を対象としたものがほとんどで、それも季節に応じた保温性や吸汗性などの状況に応じた服装の機能性に焦点を当てた研究である。デザインや色彩に焦点を当てた研究はほとんど見られず、幼児の服装と母親の色彩に対する嗜好性との関連性[11]、母子間の色への嗜好性の相違についての研究[12]や、幼児の色彩への嗜好性と着たい服の色との関連性を研究[13]があるのみである。

また、保育者の服装に関する研究は、ほとんど見当たらず、三塚(1984)[14]の80年代当時の保育者の服装の実相をもとにその問題点や提案を行った論考が存在するのみである。しかし、三塚(1984)が上衣とズボンの色の組み合わせについて、「いろいろ、組み合わせしてみる。その組み合わせに、その人の労働と生き方に対する考え方やセンスがあらわれるのである。」と述べている。つまり、保育者の被服の色彩

について研究をすることで、保育者として生きることの意味や働くことへの意識、そしてそこで形成した信念や自己概念などを明らかにできると考えられるのである。

そこで、本研究では、保育者が自らの服装を選択する際の意識の実相について明らかにし、保育者の生き方や仕事への取り組み方について検討を行うことで、保育者にどのような専門性が求められるのか検討を行おうと考えた。

## 2. 研究方法

### 2.1 混合研究法の選定理由

本研究では、保育者が自らの被服を選択する際の意識について、とくに色彩に焦点を当ててその在り様を明らかにすることを目的とする。先に示したように、被服を選択するとき、保育者自身が持つ被服の色彩についての嗜好性や選択する際のポジティブな感情など、保育者個人の心理からの影響が要因の一つとなる。しかし、それだけで被服が選択されるわけではなく、保育者が置かれた社会的な状況もその選択に影響を与えることが先行研究によって示唆されている。

そこで本研究では、まず、(i)保育者の被服について、その色彩が人の心理にどのような感情を生み出すのか、質問紙調査をもとに心理尺度を作成してその特徴や相違について量的な手法で明らかにする。次に、(ii)その結果を保育者に提示して、保育者が自らの被服を選択する際に、色彩について日頃どのような点に注意している点についてインタビューを行い、選択プロセスにおける保育者の思考の実相について質的な研究手法を用いて社会的な状況を含めて明らかにする(Figure1 参照)。以上のように、本研究では「Quan→Qual」という順次的探究デザインを採用し、研究を進める。

## 【順次的探究デザイン】

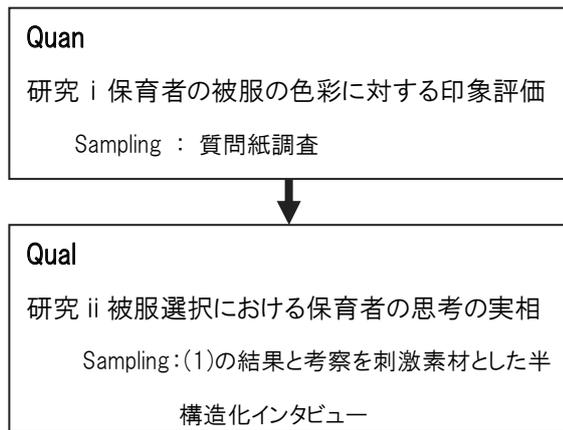


Figure1 混合研究法のデザイン

## 2.2 研究 i :SD 法とその質問項目の選定について

質問紙の作成にあたっては、服装の色彩の印象変化に関する研究[15]を踏まえ、セマンティック・デフアレンシャル法 (Semantic Differential Method、以下:SD 法)を用いることとした。質問項目の構成にあたっては、被服の色彩の印象評価に関する先行研究で用いられた形容詞対 22 項目と、性別と年齢、被服の色彩の嗜好性、好感度の 4 項目によって質問紙を作成した。比較する色は、12 色の色相環を参照し、Table1 に示した 8 色を選定した。

また、印象評価を行う保育者の服装のスタイルやデザインの種類については、日常的に保育者はズボン、キュロットスカート、ジャージなど多種の被服を着用しており、さらに上衣との組み合わせを考えると膨大な選択肢となってしまふ。そこで、多くの保育者はエプロンを被服として用いていることを鑑み、エプロンの色彩について図を構成し、それを見ながら質問項目に答えるような形式で調査を実施することとした。

調査対象は、保育園や幼稚園に子どもを預ける母親や父親に近い年齢を想定したため、18 歳以上 30 歳までの成人男女(男性 40 名、女性 41 名、合計 81 名)に質問紙調査を行った。

Table1 採用した図と色



色	カラーコード	色	カラーコード
Red	#FF0000	Purple	#800080
Yellow	#FFFF00	Green	#008000
Orange	#FF8C00	Paleturquois	#AFEEEE
Pink	#FFC0CB	Black	#000000
Blue	#0000FF	White	#FFFFFF

## 2.3 研究 ii :インタビューと分析方法の選定について

研究 ii では、i の結果と考察を保育者に提示し、どのような人が、どのような色のエプロンに、どのような印象評価を行っているのかを示す。そして、複数の保育者に対して、Table2 に示した項目について質問項目を基にした半構造化インタビューを、グループ・フォーカスの形式で実施する。

インタビューによって得た言語データは、SCAT(Steps for Coding Theorization)[16]によって分析する。SCAT は、比較的小きなデータからも、構成概念を4つのステップによって明示的に抽出することが可能で、言語データのメタな意味まで読み取り、それをもとに理論的記述を得ることができる分析方法である。そこで、SCAT を用いて保育実践において保育者がエプロンの色彩の選ぶ際の要因や意図、意味づけについて社会的な状況も含めて、より細やかに明らかにしようと考えた。

研究協力者は、保育歴 20 年以上の熟達した保育者で、同僚保育者たちを主導的な立場で保育実践

Table2 保育者のエプロンに対する印象評価尺度

内容	因子							
	F1	F2	F3	共通性				
04. やわらかい	----	かたい	$\alpha=.875$		-0.827	.219	.142	.748
03. 厳しい	----	優しい			.812	-.126	.022	.776
09. 親しみにくい	----	親しみやすい			.773	.120	.098	.692
05. 冷たい	----	温かい			.759	.195	-.224	.634
10. 不安になる	----	安心する			.729	.101	.187	.591
22. 圧迫感がある	----	圧迫感がない			.491	-.216	.284	.277
02. 地味な	----	派手な	$\alpha=.814$		.152	.885	.034	.503
01. 目立たない	----	目立つ			-.001	.882	.031	.432
19. ぼんやりした	----	はっきりした			-.133	.603	.140	.483
20. 平凡な	----	個性的な			-.104	.563	-.116	.423
12. 不潔な	----	清潔な	$\alpha=.702$		.024	.169	.779	.537
16. くだい	----	あっさりとした			.128	-.113	.574	.662
06. 下品な	----	上品な			-.020	.069	.569	.653
15. 落ち着きのない	----	落ち着きのある			-.202	-.240	.520	.294
因子寄与					4.07	2.88	.75	
因子寄与率(%)					29.1	20.6	5.38	
第2因子との因子間相関					-.003			
第3因子との因子間相関					.358	-.557		

※最尤法、プロマックス法、累積寄与率 55.0%

Table3 性別の因子の得点の平均と標準偏差、t検定

因子	男性(N= )平均(SD)	女性(N= )平均(SD)	t値(df)	P
F1 人格的質感	3.21(.87)	3.27(1.02)	-.95(749)	Ns
F2 色調インパクト	3.36(.97)	3.29(1.02)	.89(758)	Ns
F3 品性風格	3.39(.67)	3.51(.79)	-2.41(748)	*

\* $p<.05$

に取り組む方4名(男性1名、女性3名、いずれも保育経験20年以上)に協力を得た。

### 3. 結果と考察

#### 3.1 研究 i :探索的因子分析の結果

エプロンの色彩から受ける印象評価に関する形容詞対22項目の評定値に探索的因子分析(最尤法・プロマックス回転、SPSS11.51J)を行った。初期の固有値が1を超えるのが3因子までであったので、3因子モデルを用いた。さらに、探索的因子分析を繰り返

しつつ、各因子に付加する項目を基に質問項目を精選して14項目に絞った。

次に、以上の作業で残った3因子、14項目の評定値に対して、探索的因子分析を行い、さらにクロンバックの $\alpha$ 係数を産出した。その結果、.702~.875と概ね高い数値を示し、確認的因子分析の因子として想定した3因子モデルを抽出し、このモデルを保育者の被服の色彩印象評価尺度として示した(Table3)。

この保育者の被服の色彩印象尺度の3因子に対して、絶対値が.400以上の負荷量を持つ質問項目

をもとに、その因子の解釈を行った。以下、その解釈である。

まず、第1因子では、優しさや親しみ、温かいなどの人の見た目や性格などを表す際に用いる形容詞が用いられている。そこで、第1因子を「人の性格が持つ雰囲気的印象づける(以下、F1 人格的雰囲気)」因子( $\alpha = .875$ )とした。次に、第2因子では、派手さ、目立ち、はっきりという色調やコントラストの強度を評価する形容詞が用いられている。そこで、第2因子を「色調やコントラストによるインパクト度合いを印象づける(以下、F2 色調インパクト)」因子( $\alpha = .814$ )とした。最後に、第3因子では、清潔さや上品さ、あっさりさなど人や物が持つ品格や清廉さの印象に関する形容詞であった。そこで、第3因子を「品性や風格などの印象に関する(以下、F3 品性風格)」因子( $\alpha = .702$ )とした。

### 3.2 t 検定の結果

先に示した「保育者のエプロン色彩印象評価尺度」の3つの因子の得点をもとに、性別でt検定を行った(Table3参照)。その結果、F3品性風格において、性別の間に有意な差があることが示され、女性の方が高い評価をつけていることが明らかになった。

#### 3.3.1 要因の分散分析

次に、「嫌いー好き」の質問の結果をもとに、各色間の好感度の比較を分散分析で行った。その結果、紫色と黒色が他の色と比較して好感度が有意に低いことが明らかになった(図2参照)。

さらに、全ての色ごとに各因子の得点をもとに分散分析を行った。その結果、3つ全ての因子において、色間に有意な差が存在することが明らかになった(図3,4,5参照)。また、好きな服装の色彩(暖色系、寒色系、モノトーン)ごとの各因子の得点をもとに分析をおこなったが、すべての因子において有意な差は見られなかった。

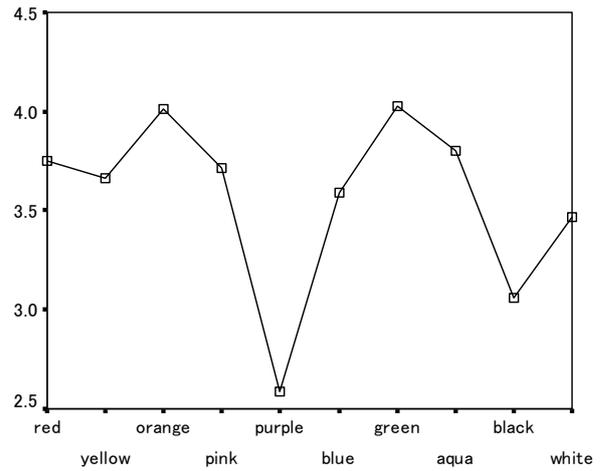


Figure2 好感度評価の平均値の比較

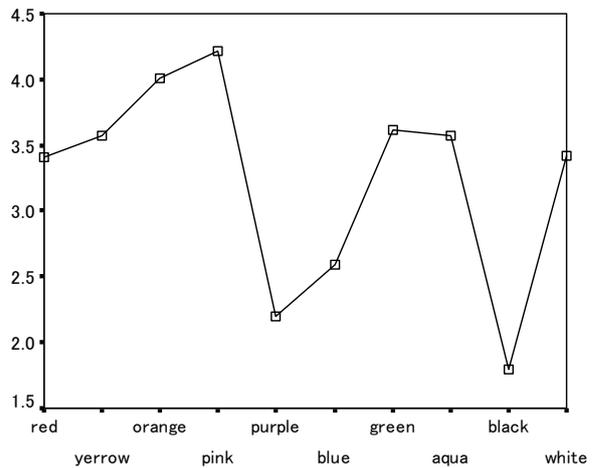


Figure3 F1 人格的雰囲気:平均値の比較

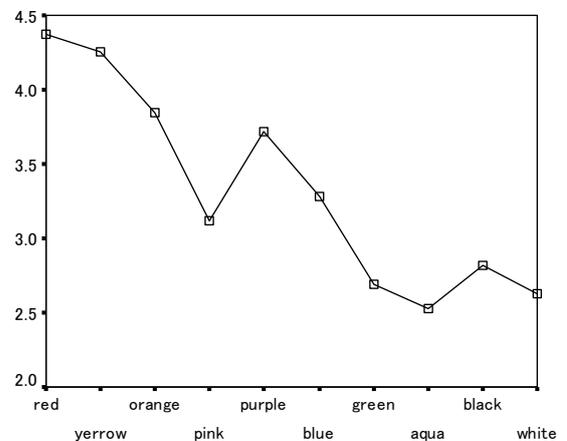


Figure4 F2 色調インパクト:平均値の比較

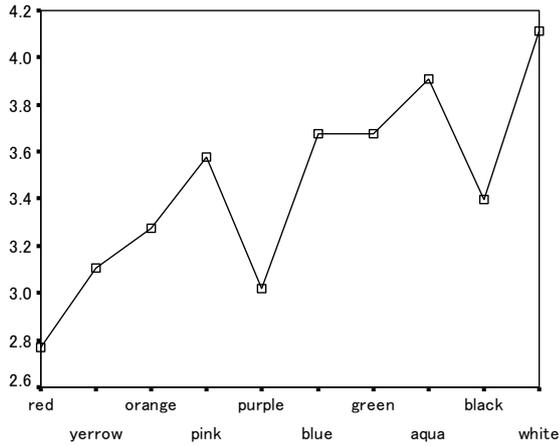


Figure5 F3 品性風格:平均値の比較

### 3.4 2 要因の分散分析の結果

以上の結果から、エプロンの色彩印象評価尺度は、性別、色によって相違がみられる可能性が示唆された。そこで、「色(10水準)×性別(2水準)」の2要因の分散分析を行うこととした。F1 人格的雰囲気では、色と性別の交互作用は、 $F(12,242)=4.39$ であり、0.1%水準で有意であった。そこで、単純主効果の検定を行い、黄、ピンク、緑、白の4色において、性別の単純主効果が有意で、いずれの色においても女性の評価が高かった(図6参照)。

次に、F2 色調インパクトでは、色と性別の交互作用は、 $F(9,740)=6.27$ であり、0.1%水準で有意であった。そこで、単純主効果の検定を行い、ピンク、紫、青、水色、白の5色において、性別の単純主効果が有意で、紫、青が女性が高く、ピンク、水色、白が男性が高く評価していた(図7参照)。

次に、F3 品性風格では、色と性別の交互作用は、 $F(9,740)=4.30$ であり、0.1%水準で有意であった。

そこで、単純主効果の検定を行い、黄、ピンク、紫、緑、水色、黒、白の7色において、性別の単純主効果が有意で、紫が男性が高く、他の6色は女性が高い評価をしていたことが明らかとなった(図8参照)。

さらに、「好きな被服の色彩(3水準)×色(10水準)」の2要因の分散分析を行うこととした。F1 人格的雰囲気では、好きな被服の色彩と色の交互作用は、 $F(18,730)=1.74$ であり、5%水準で有意であった。

そこで、単純主効果の検定を行い、赤と白の2色において単純主効果が有意で、赤では暖色系の評価が寒色系よりも高かった。また、白では、モノトーン系の評価が、寒色系よりも高かった。F2、F3においては、好きな被服の色彩と色の交互作用は有意な差は見られなかった。ただし、F2とF3では、色の主効果が有意であったために、多重比較を検討し、F2では赤色が一番高い評価(Figure9参照)で、F3では、白が一番高い評価であったことが示された

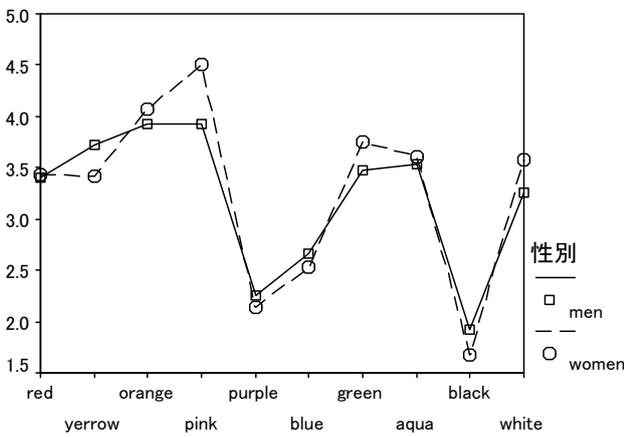


Figure6 F1 人格的雰囲気:色×性別  
分散分析の結果

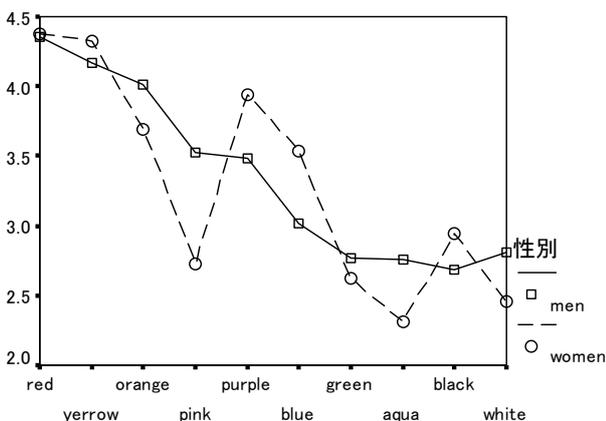


Figure7 F2 色調インパクト:色×性別  
分散分析の結果

(Figure10 参照)。

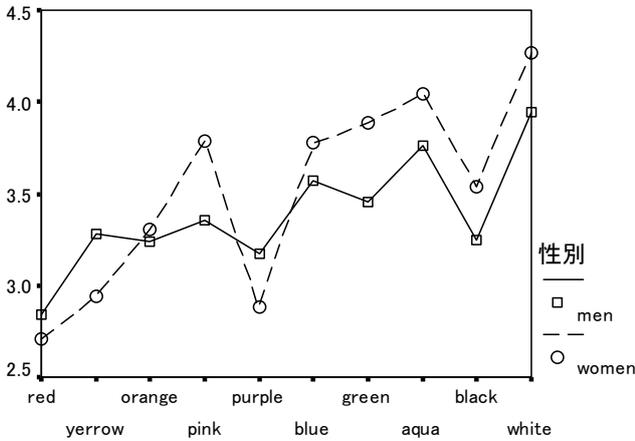


Figure8 F3 品性風格:色×性別  
分散分析の結果

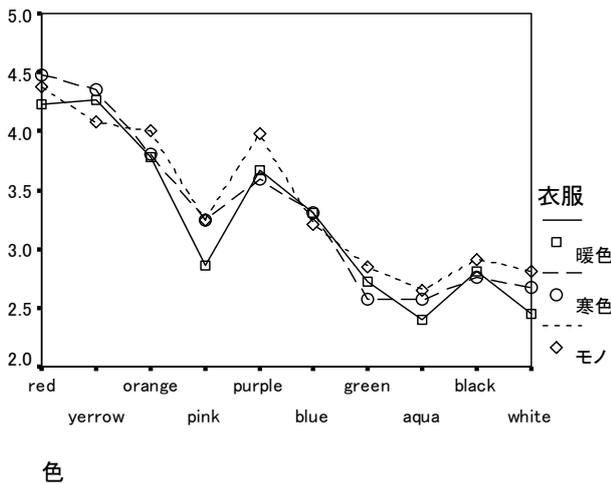


Figure9 F2 色調インパクト:好きな被服の色彩と色との多重比較

最後に、「性別(2水準)×好きな被服の色彩(3水準)」の2要因の分散分析を行った。F1、F2因子においては、「性別\*服装」の交互作用に有意な差は見られず、さらに、性別、服装の主効果についても有意な差は見られなかった。F3因子においては、「性別×服装」の交互作用に有意な差は認められなかったものの、性別の主効果については5%水準で有意な差が見られた。図を参照すると、暖色、寒色が好きな男女において、F3因子の得点に違いが見られた

(図11参照)。

これは、t検定によって得られた「F3:品性風格因子において、男女間に有意な差が見られた。」という結果とともに考えると、とくに、暖色・寒色が好きな男女間においてF3:品性風格因子に差があることが示唆された。

### 3.5 考察 i : 自分の印象とエプロンの色の使い分け

本研究の結果から、保育者のエプロンの色彩について、F1人格的雰囲気、F2色調インパクト、F3品性風格といった3つの因子で印象を評価していることが示唆された。因子ごとでは、F1人格的雰囲気ではピンクやオレンジ、F2色調インパクトでは赤や黄色、F3品性風格では白や水色への評価が高かった。この結果から、保育者が自らのエプロンの色彩を選択する際に、優しさや親しみやすさなどの人格的な柔らかい雰囲気を演出したいときには、ピンクやオレンジなどの色を用いて、他者に自分の存在を印象付けたいときなどは、赤や黄色などの色、知性やおしとやかさを演出したいときには白や水色などを用いることが有効であると考えられるのである。

### 3.6 父親と母親の印象の違い

また、t検定や分散分析の結果から、同じ因子においても、性別や自らの被服への嗜好性によって同じ色彩に対する印象評価が異なることが示唆された。この結果から、父親と母親の間に、保育者のエプロンの色彩に対する印象評価が異なると考えられ、母親が送迎することの多い子育て広場と、逆に父親の参加が多い行事などでは、保育者のエプロンの色彩の選択する際の意識を使い分ける必要があると考えられる。

### 3.7 保護者理解のツール

また、F3品性風格においてのみ、好きな被服の色彩によって、保育者のエプロンの色彩から受ける印象評価が異なることが示された。自分の担当の子ども

の保護者がいつもどのような服装を好んで着ているのかを知ることも、その保護者から自分がどのような印象評価を受けているのかを知る手掛かりになると考えられる。

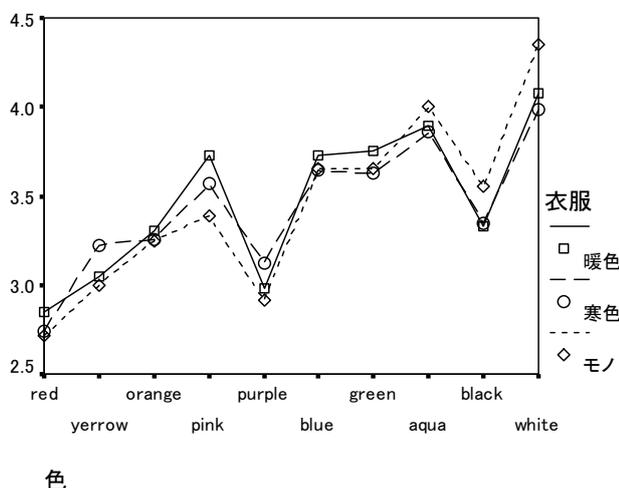


Figure10 F3 品性風格:好きな被服の色彩と色との多重比較

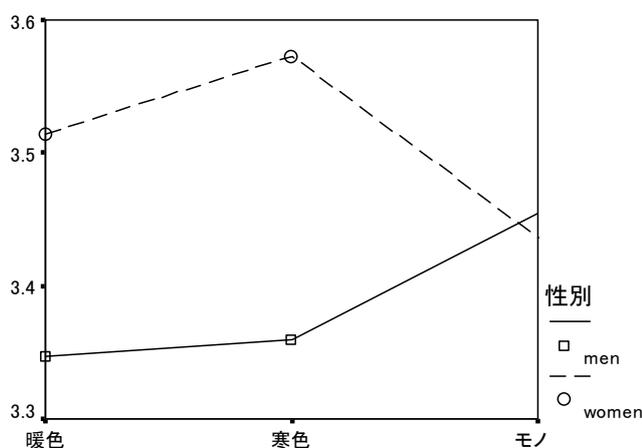


Figure11 F3 品性風格:好きな被服の色彩と性別との多重比較

### 3.8 研究 ii インタビューデータの SCAT 分析の結果

保育者がエプロンの色彩の選ぶ際の要因や意図、意味づけについてグループ・フォーカス・インタビューを実施し SCAT を用いて分析した。以下、SCAT の分析結果から得られたストーリーライン(表 4)を示し、理論的記述を考察として示す。

### 3.9 理論的記述 エプロンの選択と保育者という社会的役割

保育者は、エプロンの色彩について、普段の私服の色彩感覚とは異なる感覚を持っており「保育者」という社会的役割をより自覚し、ピンクやオレンジなどの淡い色調でかつ明るめの色彩を選択していることが示された。さらに、保育者は、自分が担当している子どもの年齢や発達段階、機能性、季節感、遊びの種類を考慮して、日々のエプロンを選択していることが明らかとなった。例えば、5 歳児の担任になると、男性保育者はエプロンを身につける機会が減ることが語られている。

### 3.10 子どもの発達によるエプロン選択の変化

また発達が進むと子どもたちにとって、エプロンは間接的な保育環境の一つとなっていく。そのため、保育者のエプロンへの子どもの関心は日々を追うごとに薄まり、その薄まりに応じて保育者のエプロンの選択も変化していくことが示された。さらに、保育者は保育中での着替えを想定してエプロンを複数持ってきて園にストックしており、1 日の中で子どもの変容や活動の変化に対応して、その場に応じてエプロンを着替えていることが示された。

### 3.11 エプロンの購入について

保育者の着用するエプロンの購入は大きく二つの方法があり、一般企業か保育業者から購入していることが示された。そのなかで職場の仕事着への制約や子どもの発達過程、関係性の構築なども意識しつつ自分にあう趣向のものを選んでいくことも示された。また、他の保育者のその時々エプロンについては意識を多く向けていないものの、特定の保育者が特定の色彩を嗜好する傾向を把握しており、他の保育者と色彩がかぶらないように、同僚保育者の嗜好する色彩をあまり用いないことが示された。また、保育現

表4 SCAT分析によるストーリーライン

<p>(1) 保育者たちは<u>仕事着の色彩</u>における<u>個々の無意識的志向</u>は、<u>仕事着以外において暖色の服を好む年齢</u>でありながらも、徐々に<u>色彩感覚の変化</u>がみられるようになってきている。またそのなかで、<u>仕事着に対して、趣向の変化に戸惑う保育者の存在</u>や<u>他者の為に仕事着を選ぶ姿</u>が示され、中には自分の本意ではない色彩のために<u>限定的な着用</u>をする保育者もいる。同時に<u>仕事着の色彩について保育環境がもたらす限定的な色彩意識</u>を促しており、<u>社会的立場の中で個人的嗜好に捉われない服装</u>でもある。</p> <p>保育者は<u>仕事着の色彩について日常の色彩感覚とは異なっており</u>、かつ<u>保育環境による限定的な着用意識</u>があったり、<u>仕事着での行動範囲</u>などが限定されていることなどから、<u>仕事着のもつ意味や環境がもたらす服装感覚</u>が存在したりしていると感じている。仕事着の色彩には、<u>年齢に左右される一部の色彩</u>や<u>買い替えの判断材料にもなる色彩</u>があり、仕事着を購入する際は、上記を意識しつつ持っている仕事着の<u>色彩の偏りを避けようとする保育者の思い</u>が働いている。その一方で<u>敬遠される限定的な色</u>も存在していて、それらは、<u>仕事着の趣向により生かされる限定的な色</u>であると捉えられている。</p>
<p>(2) 仕事着は、<u>低年齢児に対して子どもの興味関心の的</u>となり、<u>子どもとの関係性構築のチャンス</u>となるため、保育者は、<u>時期や保育環境での非現実的な存在の活用</u>や、<u>発達に合わせた非現実的な存在の活用</u>をしたり<u>安心感をもたらす色彩</u>を意識したりしている。低年齢児以外に対しては<u>発達による興味関心の違い</u>や<u>発達による認知的な成長</u>などから<u>仕事着の構造</u>には関心を示すものの、<u>子どもの仕事着への興味関心の程度</u>は低く、<u>無意識な子どもたちの姿</u>がある。保育の中では<u>仕事着の色彩</u>がもたらす<u>他者の意識的行動</u>は少なく、一部の<u>保育者の仕事着</u>を意識する子どもの<u>主体的行動</u>をのぞくと、日常的に<u>保育環境の中に溶け込んでいる仕事着</u>の存在がある。</p> <p><u>仕事着を着用する意義</u>には<u>機能性にこだわりを見出す保育者の姿</u>から<u>趣向ではなく使いやすさを意識する保育者の姿</u>がある。また<u>年齢に応じた仕事着の着用</u>の有無や<u>仕事着の着用について客観的視点の移行</u>も行われている。</p> <p><u>仕事着の着用について</u>、保育者は<u>保育者間の他者理解</u>や<u>異性別に対しての他者理解</u>などによって<u>仕事仲間を意識する自分</u>となり、<u>色と仕事仲間</u>を結び付ける自分でもあるものの、<u>実際には仕事着に関して他者への無配慮</u>がある。また保育者は<u>他者から見た色彩イメージへの共感</u>や<u>懐疑的感情</u>をしており、自分のもつイメージと周囲からの<u>客観的な色彩のイメージの違い</u>も感じている。</p> <p><u>仕事着の季節的な使い分け</u>をしている保育者もいて、保育者は<u>性別限定的な仕事着の着方</u>もあるものの<u>仕事着の季節的な着用意義</u>を感じている。</p> <p>また保育者は<u>保育環境の中で起こるアクシデント</u>や<u>衛生面が保障されない場面での着替え</u>をすることがあり、それ以外では<u>仕事着の着替え</u>をすることは少ない。また<u>日常的に複数枚用意されている仕事着</u>にも<u>ヒーローテーション</u>になる<u>仕事着の共通点</u>が存在している。仕事着については<u>利便性を高めた仕事着</u>が登場して来たり、<u>普段着への接近</u>が見られたりしており<u>進化する仕事着</u>の存在もある。</p>
<p>(3) <u>仕事着の購入方法</u>においては<u>非現実的な存在と関係性を持つ一般企業と一般企業との棲み分け</u>を狙う保育業者からのいずれかであり、<u>趣向の違いによる保育業者間でのさらなる棲み分け</u>も起こっている。<u>仕事着の購入理由と判断理由</u>は<u>非現実的な存在</u>を結び付ける<u>色彩</u>や<u>購入者の年齢限定的な仕事着の趣向</u>などのほか、<u>保育環境の中での非現実的な存在</u>が持つ意味、<u>指定された仕事着</u>ではなく<u>比較的自由度の高い仕事着の選択</u>ができる環境などがある。また子どもの<u>成長過程や関係性の構築</u>を意識して<u>仕事着を選ぶ保育者の姿</u>もあった。また保育業者や女性用を意識している一般企業では<u>男性用の仕事着</u>が少ないものの、<u>ユニセックスな仕事着</u>として販売している。同時に保育者は<u>一般社会の中での男性用仕事着のイメージとの違い</u>も感じている。</p>

場における男性のエプロンについてはユニセックス的な認識であり、料理人などの一般社会での男性のエプロンとイメージに違いがあることが示された。

#### 4. 総合考察

本研究では、保育者のエプロンの選択における色彩への評価について、【研究 i】と【研究 ii】との混合研究方法による研究デザインを用いて成果を得た。本

章では、これまでの成果をもとに、保育者の被服の選択における色彩の影響について総合的に考察を行う。

#### 4.1「保育者らしさ」と人格的雰囲気に関連

研究 ii において、保育者は担当する子どもの年齢を考慮しつつ、保育者としてふさわしい色彩を強く意識して選択しており、普段の私服では着ることがないピンクやオレンジ、黄色などの淡くて明るめの色彩を選択していることが示された。この結果は、保育者のエプロンの色彩評価が3つの因子によって構成されていることを示した研究 i の結果を踏まえて考えると、他者から受ける評価として F1 人格的雰囲気の因子の項目である優しさや親しみやすさを強く意識して保育者がエプロンの色彩を選択していると考えられる。以上のことから、保育者は自らの職業的な役割と、優しさや親しみやすさなどの F1 人格的な雰囲気を関連づけており、その意識が保育者のエプロンの選択に大きな影響を与えていると考えられるのである。

#### 4.2「保育者らしさ」の中に自分らしさの強調

研究 i において、エプロンの色彩について男女間に有意な差があることが示された。この性差について、研究 ii でも、保育者らしい色彩を選択するだけではなく、その中にも他の保育者との嗜好性の違いを互いに自覚していることが示され、とくに男性保育者は自らのエプロン選択において、自らのジェンダーを意識し、青や緑などを基調とした色彩のエプロンを購入していることが示されている。また、性差だけでなく、保育者がエプロン購入の際に、自らの年齢や他の保育者が嗜好する色などを考慮した上で、自らのエプロンを購入していることが示された。つまり、保育者は「保育者らしさ」だけにしばられているわけではなく、ある程度の限定された中でも、自らのジェンダーや年齢、嗜好性を加えて自分らしい色彩のエプロンを選

択していることが示唆されたのである。

#### 4.3 場面におけるエプロンの色彩の適応性

研究 ii において、保育者がエプロンの色彩について季節ごとに変えたり、1 日の中でもその色彩を換えたりすることが示された。ままごと遊びの場面などの活動が盛んなときは赤などの派手目のエプロンを選択したり、食事の時間などの場面では清潔感のあるエプロンに付け替えたり、子どもの活動の様子をみてキャラクターがデザインされたエプロンを選択したりと、その場に適応させていることが語られていた。この語りから、研究 i で示された F2 色調インパクトや F3 品性風格などの項目を考慮して、その場に適応したエプロンを保育者が選択していると考えられるのである。

### 5. 課題と展望

#### 5.1 保護者からみた保育者の被服の色彩

研究 i では、被服の嗜好性の違いによって、F3 品性風格の項目に関する保育者の被服への評価が異なることが示されている。このことから、保護者が普段身につけている被服の色彩への嗜好性の違いを理解することによって、保育者への品性に関する印象をコントロールすることが可能と考えられる。

しかしながら、研究 ii では、保育者はエプロンの選択において子どもの年齢や発達と関連付けている語りが多くみられたものの、保護者との関連性についての語りは見られなかった。しかし、子育て支援や家族支援などの事項が保育者の新たな専門性として示されている現代において、保護者から保育者自身がどのように印象評価されているのかを、推測しつつ自らの被服を選択することは、保護者と円滑なコミュニケーションを築く上で重要な能力であると考えられる。保護者からの印象評価についても、保育者が自らの被服選択の際に考慮するような意識を持つことが今後求められると考えられる。この点については、今後

の課題としてさらに研究を進めていきたい。

## 6. 引用文献

- [1] 伊藤遼介:パッケージデザインが官能評価に与える影響に関する研究. 中央大学大学院研究年報理工学研究科編. 41. pp.1-4, (2011)
- [2] 萩原康予:名産食品のパッケージデザインと色彩におけるディレクション. 日本色彩学会誌. 36. pp.58-59, (2012)
- [3] 押山八重子, 家本修:一般好嫌色と被服着用好嫌色との相違性, 日本色彩学会, 1(3), pp, 143-149, (1997)
- [4] 佐藤典子, 木村敦, 高橋望, 山田寛:カラーバリエーションが若年女性における衣服選択の意思決定プロセスに及ぼす影響(2):25色での検討, 日本色彩学会, 38(2), pp, 53-64, (2014)
- [5] 藤倉皓平:複数の衣服を認識し色や柄を変換するリアルタイム仮想試着の提案, 情報処理学会研究報告 GN, 91(75), pp.1-6, (2014)
- [6] 高口央:携帯電話や服の色に性格は現れるか?, 流通経済大学社会学部論叢, 22(2), pp.65-75, (2012)
- [7] 雙田珠己, 村上精一:衣服の色彩選択を支援する授業プログラムの構築と実践, 熊本大学教育実践研究, 28, pp.41-48, (2011)
- [8] 細谷佳菜子, 服部由美子, 浅野尚美, 柘植泰子, 森透:児童生徒の服装に対する意識と着装行動, 福井大学教育実践研究, 32, pp.157-165, (2008)
- [9] 坂田哲夫, 堤陽子, 鶴鉄雄, 木本晴夫, 串間和彦:色彩教育のための配色の印象の因子の抽出, 日本色彩学会誌, 25, pp.76-77, (2001)
- [10] 田村和子:女性教師の服装に対する児童の認知, 日本家政学会誌, 54(9), pp.769-776, (2003)
- [11] 高旗浩志(1996) 教師服装の社会学的研究
- 服装規定の分析を中心に, 教育学研究紀要 42, pp.160-165
- [12] 岡佐智子:幼児の服装と母親の色彩嗜好, 日本保育学会大会研究論文集, 41, pp.772-773, (1988)
- [13] 大塚美智子, 大久保春乃:二集団における服飾に関する嗜好の相違:保育園児とその母親の場合, 研究紀要, 第Ⅲ分冊, 短期大学部(Ⅱ), 26, pp.39-43, (1993)
- [14] 高橋春子, 和田恵美子:幼児の色彩嗜好に関する研究—嗜好傾向と服の色, 家政学雑誌, 23(3), pp.23-28, (1972)
- [15] 三塚タケオ服装の社会学(一)—保育労働者の仕事着, 評論・社会科学, 同志社大学人文学会, 24, pp.51-72, (1984)
- [16] 加藤雪枝, 雨宮勇, 橋本令子:被服の色彩が着用者に及ぼす心理的, 生理的影響:SD法, 脳波, 心電による解析, 日本家政学会誌, 55(7), pp.531-539, (2004)
- [17] 大谷 尚:4ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案 —着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き—, 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(教育科学), 54(2), pp.27-44, (2008)